

# 今、そこにある悲しみ

御母堂歩々

## 今、そこにある悲しみ

---

私は去年、四十路を迎えた。

夫と夫婦二人暮らしで、子供は居ない。

恥ずかしながら我が家の所得水準は結婚当初より低く、それゆえ子供を作らないでおこうと以前から夫と話し合っていた。

が、もう生理学的にもタイムリミットを迎える。

“産めるけど産まない”から“危険だから産めない”または“産めないから産まない”に変わる時が来たのだ。その去年の誕生日、私は夫に言った。

「本当に、子供はいらないの？ もう産めなくなるけど、本当にいいの？ 私はいいけど、貴方はいいの？」

そしたら、夫の口から帰ってきたのは、意外な答えだった。

「うん。そうだね。父親として稼げる自信がないからいらない……って言っていたけど、本当は別の理由もあるんだ。その理由もちゃんと話しておかなくっちゃね」

「今、もし僕自身が生まれ変わって、明日から誰か別の人の赤ちゃんになって人生をやり直すことができるとする。神様に“どうする？”と聞かれたら、僕は断る。何故なら、今でも毎日が大変なのに、今から新生児になって大きくなった頃には、きつともっと大変になっているだろうから。その時に今ぐらいの水準で働けている自信なんて全然ないよ」

「そしてそうなったら、きっと僕は親を恨んでしまうだろう。“これからより厳しい時代が待っているとわかっているのに、何故僕を産んだのか”そういう意味でも、子供は要らないよ」

つまり、父親としての立場だけでなく、自分自身が子供の立場になっても“産まれたくない”という理由だった。

それぐらい日々の生活が辛いのだ。

私自身、扶養範囲内とはいえ働いている。そこで私が見たものは、パートで働くおばちゃんに混じって、就職できないでいるたくさんの優秀な若い人達。時給は安くても要求される水準は世間のものと同様で、日々の仕事もきちんこなせているのに、なかなか就職できないでいる。

私はこの時、夫の立場を思い遣り辛い立場を理解した。そう思った。

それがとんでもない思い上がりであったことを、この一冊の本は教えてくれた。

夫と話し合いをした後、二～三ヶ月ほど過ぎた頃だっただろうか。

書店でなんとなく手にしたのが、この『石田徹也遺作集』だった。

ユーモラスでシュールな絵……しかしこの絵をじっと見ていると、心が次第に冷えていくのがわかる。

そして、凍えて痛くなっていく。

特に、牛丼屋さんの絵。

ガソリンスタンドのように、お客さんのサラリーマンにガソリンを流し込んでいる。

こうやって皆、お昼にお金と時間をかけないでムリヤリ胃袋を満たして、仕事場に帰って行く。

夫もその内の一人だ。

そして馬車馬のように働く。

かつての日本では考えられないような低賃金で。

この絵を見て、涙が止まらなくなった。

普段、気が付かない。でも、そこかしこにある悲しみ。

気付かせてくれたのは、この本。

描かれた石田徹也画伯は、若くして既に亡くなられているが、本当に惜しい。

もっともっと、こうやって教えて頂きたかった。

夫にはもう少し、やさしくしようと思った。

そして実際にほんの少し、やさしくなったような気がする。

……気がするだけかもしれないけど。

## 今、そこにある悲しみ

<http://p.booklog.jp/book/44669>

著者：御母堂歩々

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/pupunet1/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44669>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44669>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.